

石郡英一の

## “老話”

介護職に聞いてほしい  
高齢者と家族の物語

## 第2話

おばすてやま  
姨捨山②

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日総研出版）がある。

## 前回のあらすじ

認知症と診断され一人暮らしが難しくなった日比生子だったが、本人にはその自覚がなく、自宅での一人暮らしを希望していた。しかし、母を心配する息子誠と娘孝子の強い勧めもあり、生子は小学校時代の同級生吉田が経営する有料老人ホーム「えみの里」に入居することになったのだが…。

## 1. 天国

〈1〉

生子がえみの里に入居してから3日が経った。生子の部屋は

3階の南側で、日当たりもよく、窓からは庭が見えた。

施設での生活は気楽なものだった。えみの里では、決められた食事時間になると、三度三度介護スタッフが部屋まで呼びに来た。食事はホールと呼ばれる30畳ほどのリビングでほかの入居者と一緒に食べる。食事前のテーブルにはおしぼりとお茶が用意されている。食事は彩りもよくおいしい。その上食べやすい。魚は骨が外してあり、すべての食品が柔らかく加工されている。食べ終わると介護スタッフが下膳してくれる。生子はまさに上げ膳据え膳のおもてなしに思えた。

入浴も甲斐甲斐しく手伝ってくれる。それぞれの階に浴室が設けてあり、10時から10人ほどの入居者が順番に入る。スタッフがお風呂にお湯を張ってくれている。着替えの準備から着替えの手伝い、入浴時のケアまで丁寧に行ってくれる。洗濯物も洗ってくれ、乾いたらきれいに畳んで戻してくれる。風呂上がりには髪を乾かして整髪し、爪を切るのも手伝ってくれる。その上、風呂上がりにはお茶まで用意されている。

トイレには手すりを取り付けられ、便座は温かくシャワートイレとなっている。床・洗面所・トイレの掃除を毎日行ってくれる。

生子は1日中ほとんど、自宅から部屋に持ち込んだTVを観

て過ごしていた。

“ここでは何もなくていいんだ…本当に天国のような生活なんだなあ…”

生子は漠然とそう感じていた。

入居3日目の日曜日の14時、誠一家と孝子が面会に訪れた。居室は狭いので、共用のホールで面会した。

「母さん、ここでの暮らしはどう？」

「ここは天国のようなところよ……天国ってことは、この世に私はもういないってことかなあ…」

誠の問いに、生子は笑顔で、本気とも冗談とも取れる答えを返した。

「お父さん、僕たちおばあちゃんの部屋でゲームしてきてもいい？」

誠の2人の小学生の息子たち、隆と盛雄は、介護施設が退屈な場所だと知ると、すぐに遊べる場所を探し求めた。

「すみませんお義母さん。ここにいても落ち着かないようなので、子どもたちに部屋を貸してもらえませんか？」

誠の妻良子がすまなさそうに生子に尋ねると、生子は笑顔で答えた。

「どうぞ、どうぞ、いくらでも使ってちょうだい」

「お義母さん、ありがとうございます」

頭を下げる良子の横を、誠の子どもたちは生子の部屋に向かって一目散に走り出した。

子どもたちが生子の部屋で

ゲームに夢中になっている間の2時間、生子は誠、良子、孝子とゆっくりと話げできた。孝子がえみの里での生活を聞くと、生子は自分が感じた天国のような生活をだるそうに話した。

「お母さん、そんなに楽な生活ができていのに、何か不満そうね」

「いや、不満なんてないわよ。ただ、全部やってもらって申し訳ないというのか、これでいいのかなって…」

「いいよ、その分お金を払うのだから。上げ膳据え膳、至れり尽くせりの生活ができてうらやましいわ。私も早く施設に入れる身分になりたいわ！」

孝子は生子の悩みを一笑に付した。すると生子は、孝子の言葉で何かを思い出した様子で話題を変えた。

「あっそうだ！ お母さんね、お前たちに渡すものがあつたのよ。ここに来る前に渡そうと思つて、お母さんの部屋にあるタンスの一番下に入れておいていたのを忘れてしまつていたわ…」

「何を？」

「えっと…何を渡そうと思つていたんだっけ…」

「嫌だ、お母さん！ 置いた場所は覚えていのに、肝心の渡す物を忘れたの？ ははははっ」

孝子は生子の話に笑つた。つられて誠も良子も笑つた。

「お母さん、私が一緒に家の整理をした時に、通帳や印鑑、カード類など貴重品は預かつた

し、お父さんの形見はお兄ちゃんが保管してくれているから、心配しなくていいのよ。どうせ、お兄ちゃんや私が小学校の時に書いた作文集とかじゃないの？」

「忘れるくらいだから、どうせそんなものだろうね」

孝子の意見に誠も同調した。

2時間ほど話をしていたところに、生子の部屋でゲームをしていた隆と盛雄が駆けてきた。「お母さん！ もう4時だよ！ おやつちょうだい！」

良子におねだりする2人を見て誠が腰を上げた。

「母さん、じゃあそろそろ行くな。孝子はどうする？」

「私も一緒に帰るわ。お母さんまた来るわね」

誠から遅れて孝子も立ち上がった。

「そうかい…今日はありがとう。隆君、盛雄君、またね。良子さんもありがとうございました。おばあちゃんはここで失礼するね」

生子は孫たちの頭をなでながら挨拶した。

「じゃあ、また来るね」

誠が別れの挨拶をすると、皆口々に別れの挨拶を行った。

「おばあちゃんまたね！」

「ありがとう。またね…」

生子はホールのいすに腰かけたまま、誠一家と孝子を見送つた。

<2>

誠たちの面会が終わつてからしばらくして、生子が部屋に戻

ると、隆の手提げ鞆が置き忘れてあつた。中には教科書らしき本が入つていた。

「あ～あ、ゲームに夢中になつて忘れていったのだね。知らせてやらなきゃ、えっと携帯電話、携帯電話…あれどこに置いたのだろう？ おかしいなあ…」

生子は家から持ってきたはずの携帯電話が見つからないので、介護ステーションまで行きその事情を伝えた。

「承知いたしました。私の方から後で息子様にご連絡しておきますのでご安心ください」

山本と名札を付けた介護職員は笑顔で対応してくれた。

そう言われて生子は一端部屋に戻るが、すぐに教科書がないと隆が困るのではないかと心配になり、今すぐ知らせてやらなければという衝動に駆られた。

“そうだ！ 確か1階に公衆電話があつたはずよ”

そう思つた生子は、小銭の入つた財布を持って部屋を出て、エレベーターで1階に降りようとした。ところがエレベーターのスイッチを押してもエレベーターは作動しなかつた。

“あれ？ エレベーターが動かない？！ 故障かしら？”

エレベーターのドアが開かないことに生子は焦つた。エレベーターの前にあるホールでは、ほかの入居者が数人いすに腰かけていたが、生子の行動には目もくれず、ホールのTVを見たり、お茶を飲んだりと銘々に過ごし

ていた。生子はエレベーターのそばにいた女性の入居者に尋ねた。

「すみません。エレベーターが故障したみたいなのですが、階段はどちらでしょうか？」

「階段？ なかったと思いますよ」

“この方は呆けてる…”

生子はそう思い、今度は顔付きのしっかりとした別の入居者に、同じ質問を投げかけてみた。

「階段はよく分かりませんねえ…」

2人目の入居者も、先ほどの入居者と同じ答えを返してきた。“階段を知らないなんて、おかしな人たちだなあ？…そうだ！職員に聞けばいい！”

そう思った生子は、介護ステーションに戻り、先ほどの介護職員山本に尋ねてみた。

「1階の公衆電話で電話をかけてこようと思うのですが、エレベーターが故障しているようで動きません。階段のある場所を教えてくださいませんか？」

「先ほども申し上げましたとおり、私の方から後で息子様にご連絡しておきますのでご安心ください」

対応した山本は先ほどと同様に笑顔で対応してくれたが、納得できない生子は事情を詳しく説明しはじめた。

「お気遣いありがとうございます。先ほども申し上げましたが、息子たちが面会に来てくれた際、孫が私の部屋に教科書を忘れた

のです。今し方帰ったばかりですので、ここに取りに戻るにしても連絡は早い方がよいと思います。職員さんの手を煩わせたのでは申し訳ありませんので、自分で1階に行って連絡してきます。階段のある場所を教えてくださいませんか？」

きちんと意向を説明したので、生子はこれで連絡できると思ったが、山本の答えは生子の期待を裏切った。

「申し訳ございません。お一人で別のフロアに移動するのは危険ですのでご遠慮願っております。あと10分お待ちいただけますのでお待ちください」

この言葉に生子は、えみの里に来て初めて違和感を覚えた。

えみの里では、認知症の入居者が徘徊して外に出ることを防止するために、エレベーターには暗号式のデジタルロックがかけられていた。しかし現在ではその解釈が拡大し、高齢である入居者が外を歩くと転倒する危険性があるという理由で、認知症に限らず、全入居者に対して同様の措置が施されるようになり、職員付き添いでないとフロアから一步も出られない仕組みとなっていた。

“一人で出られないとはどういうことなの？”

生子は驚愕した。そして、急にこの状況から逃れたいという衝動に駆られた。

「すみません！ 電話をかけに

行くだけなのです！ お願いします！ 自分一人で行けますから行かせてください！」

生子の懇願に説得されたのか、山本は苦笑いしながら廊下にしたほかの介護職員に声をかけた。「大山さん！ 申し訳ありませんが、日比様の電話対応をお願いできませんでしょうか？」

山本に呼ばれた大山が、生子のところへやってきて、生子を誘導しはじめた。

「日比様、私が1階までお連れいたします。どうぞこちらへ」

大山はエレベーターの横にあるデジタルロックのケースを開けると、手早く6桁の暗証番号を打ち込み、エレベーターのスイッチを押した。すると、先ほど生子が何度押しても作動しなかったエレベーターが作動し、3階に停まり扉が開いた。「電子ロックだわ。…私はコンクリートの建物に軟禁されているのね。ここは都会の娼捨山……ここにいたら生きる屍……誠と孝子に教えなくては！」

エレベーターに乗せられた生子は逃げ出したい焦燥に駆られた。そこで、エレベーターの通過階を示す表示を、心の中で逃走のカウントダウンに準備、力を込めてカウントした。

“3……………とりあえず、ここから出ることを考えよう。お金はタクシー代くらいならあるわ”

“2……………一応リハビリシューズを履いてきたけど、私の脚力ではすぐ捕まえられてし

まうので、うまくこの職員を撒かなければならないわね”  
“1……………電話をかける時か、その後トイレに行くふりをして、隙を見つけてそっと逃げ出すのよ”

エレベーターが開くと、大山は生子を公衆電話へと誘導した。生子は逃走を大山に悟られないように自然に振る舞った。公衆電話は1階事務所前のエントランスホールにあった。玄関はすぐ目の前にある。

「日比様どうぞ。お使いください」  
「はい。ありがとうございます」

生子は声が震えていないか、悟られたのではないかと不安を抱えながら受話器を取った。番号を押そうとすると手が震えた。普段からパーキンソン病の方の手の震えを見ている大山は、その様をおかしいとは思わず平然と眺めていた。

生子は番号を押そうとして手を止めた。誠の電話番号が思い出せないのである。それを察した大山が声をかけてきた。

「どちらにおかけになりたいのですか？」

「息子にかけたいのですが、電話番号を忘れてしまって…」

「息子さんの携帯電話ですか？多分事務所で番号が分かるとおもいますので調べて参ります」

大山は、生子の言葉に即座に反応し事務所に入っていった。公衆電話の設置してある位置から見える事務所の中には、事務員が2人しかいなかった。1人

は正面の生子を見据え、1人は背を向ける配置となっていた。背を向けている事務員が電話をしていたので、大山はその正面を見据えている事務員を呼び、正面に背を向ける配置で、入居者名簿の置かれている奥の棚に向かって歩き出した。

“今だ！”

生子はそう思うや否や、小走りして玄関に向かった。

えみの里の玄関の自動ドアには、ロックこそかけられてはいないものの、自動ドアを作動するスイッチが成人男性が手を伸ばしてやっと届く位置に設置されており、生子のような小柄な入居者には開けられない構造になっていた。逆に外からの訪問者は自由に入ることができる仕組みになっていた。

生子がエントランスから風除室を抜け、玄関の自動ドアに近づいたまさにその時、面会に訪れた入居者のご主人と思しき高齢の男性が入ってきたため、生子はその男性の横を忍んで通り抜けることができた。

その男性が靴をはき替えエントランスを通りかかる時、事務所の中から出てきた大山とすれ違った。

大山は生子の姿が見えないことを確認すると、事務所に戻って事務員に生子の行方を確認したが、公衆電話に背を向けて電話をかけていた事務員は知らないと答えた。踵<sup>きびす</sup>を返して事務所



を出ると、エレベーターに向かう、先ほどすれ違った高齢者を呼び止めて尋ねた。

「すみません。今、玄関からお入りになりましたよね？ 女性の入居者がホームから出て行かれるのを見られませんでしたか？」  
「いや、誰もすれ違わなかったよ」

男性はそう答えた。この男性の視力が非常に衰えていることを知る由もない大山は、この男性の言葉を鵜呑みにし、生子がまだホーム内にいると思い込み、1階の部屋を調べ回った。

## 2. 帰宅

<1>

生子は後ろを振り向かず、一生懸命小走りに歩いた。えみの里から出ると外はすでに薄暗かったが、慣れ親しんだ街並みを歩くのに、道に迷うことはなかった。

大通りまで出たところでタクシーを拾って、息も切れ切れに運転手に自宅の住所を告げた。陽気な運転手は生子に尋ねた。「随分と慌てていらっしゃるようですが、どうかなさったのですか？」

生子は呼吸が整わないので、聞こえないふりをして窓の外を眺めた。幸いにも運転手はそれ以上会話を深めようとはしなかった。

10分ほどタクシーに揺られると、無事自宅に辿り着くことができた。タクシーに乗っている間に呼吸を整えることができた生子は、タクシーから降りる際、安堵のため息をついた。

生子が家の門扉を開け、玄関まで続く5mの石畳の小道を通る際、小道の両脇にある庭に植えた鶏頭や菊が、生子を出迎えてくれているようであった。花々を愛おしむように玄関まで歩を進めた生子は、入居している間忘れてはいけないと、首からぶら下げ肌身離さず持っていた家の鍵を、首から取り出した。

その鍵を使って玄関を開けると、急に警告音がけたたましく鳴った。生子は自宅にセキュリティシステムを導入したことや教えてもらった解除方法をもすっかり忘れていた。咄嗟に生子は響き渡る警告音を止めようと、警告音のする玄関に備え付けてあるBOXに近寄った。そして手当たり次第BOXに取り付けてあるボタンを押してみるが、音は鳴りやまなかった。

その時ふと、先ほど玄関を開けた時から手に握りしめている家の鍵の付いたキーホルダーに目をやった。そのキーホルダーには、家の鍵のほかに見慣れない青いスティックが取り付けて

あった。それは生子が入居する前、孝子が鍵と一緒に生子のキーホルダーに取り付けておいたセキュリティーを解除するためのスティックであった。

生子はよく分からないままその青いスティックを、警告音のするBOXの穴に指し込んでみた。すると生子の願いが通じたかのように警告音が鳴りやんだ。

生子はほっとして、玄関へ入り込むように座った。座って深呼吸をすると、たった3日間離れていただけなのに、懐かしさと安堵感で涙が溢れた。

“助かった…。もうあの姨捨山には行かない…絶対に行かない…”

## <2>

誠一家は生子の面会を終えた後、途中で食事をして帰ろうと、ファミリーレストランで休憩を取っていたところ、誠の携帯電話が鳴った。

「日比さんでいらっしゃいますか？ 私、えみの里ホーム長の石田でございます」

「はい。お世話になっております」

「いいえ、行き届きませんで…実は、大変申し上げにくいことなのですが、先ほどから日比様がホーム内に見当たりません。どうやら無断で外出されたようなのです」

「えっ！ それはどういうことなのでしょう？ 先ほどまで、私たちと面会していたばかりなのですが…」

「申し訳ありません。息子さんがお帰りになってしばらくして

から、日比様が介護ステーションにいらっしゃいました。そこで『孫が私の部屋に手提げバックを忘れて帰った。息子に携帯電話で連絡を付けようとしたが、携帯電話が見当たらないから1階の公衆電話まで連れて行ってほしい』と言われ、介護職員が1階までお連れいたしました。その時公衆電話を前に、息子さんの電話番号を忘れたとおっしゃるので、付き添った職員が事務所に電話番号を調べに行きました。職員が調べに行っているほんの1～2分の間に、どうやら出ていかれたみたいなのです。現在勤務している職員で手分けして探しているのですが、30分経った現在も見つかっていません」

「そうですか…ご迷惑をお掛けいたします。私はとりあえず、実家に行ってみます。おそらく母が行くところと言えば、そこしか考えられませんから…」

「よろしく願いいたします」

「失礼いたします」

誠は石田からの電話を切ると、ファミリーレストランでも相変わらずゲームに興じている隆に聞いた。

「隆、手提げ袋をおばあちゃんのところへ忘れたの？」

誠の問いにゲームの手を止めて、隆は考える素振りをした。

「あれっ！ しまった！ 忘れてきちゃった！」

ハーッと誠は大げさにため息をつき、首を垂れて見せた。

「お義母さんがどうかしたの？」

誠の隣にいた良子が尋ねると、不機嫌そうに誠が応えた。

「隆が手提げ袋を忘れたから電話をかけさせてほしいと、1階の公衆電話まで行くふりをして、施設を出て行っちゃったんだって！」

「えっ!! ここは天国だっておっしゃっていたのにね…。お義母さん、大丈夫かしら？」

「知らないよ! 母さんに聞いてみしてくれよ！」

そう言って、誠はいすから立ち上がった。誠はウエイトレスに注文した品物を取り消し、良子に、帰りが遅くなるといけなから、食事を済ませたらこのまま子どもたちを連れて電車で家へ帰るように告げ、一人で車で実家へ向かった。

誠は、車で一人実家へ向かう途中、帰宅途中の孝子へも連絡を取り、とりあえず自宅で待機するよう伝えた。また誠は、施設へ入居する際、嫌がる生子を説得して持たせた携帯電話にも電話をかけてみたが、反応はなかった。

“まったく、母さんはどこへ雲隠れしたんだ？”

<3>

17時30分を少し回った頃、セキユーティー会社のボードに、新たに登録された家の表示が赤く点滅し、けたたましく警報が鳴った。表示された氏名には「日比生子」と記されていた。赤い表示はすぐに停まったが、

留守宅と聞いていたため、確認の意味で早速警備員2人が現地に向かって出動した。

警備員は10分ほどで生子の家に着し、恐る恐る玄関の扉を開けると、暗がりの中生子が玄関に座っていた。

「日比さんでいらっしゃいますか？」

「はい。日比生子です」

警備員の問いかけに、生子ははっきりとした口調で応えた。

「留守中の警告音が鳴ったものですか、お邪魔いたしました。暗がりの中、大丈夫ですか？」

「はい、電気はすぐ点けますので大丈夫です。私の家ですから…。お役目ご苦労様でした」

生子はそう言って、警備員の差し出した記録物に、警備員の懐中電灯を頼りにサインをすると、警備員に深々と頭を下げて警備員を見送った。

警備員を見送ると生子はおもむろに立ち上がり、暗がりの中玄関から、生子が寝室に使っていた居室に向かった。居室に着いて電気のスイッチを押すが、電気は点灯しなかった。えみの里に入居する際、電気・ガス・水道を止めていったことを生子はすっかり忘れていた。

“おかしいわね。停電かしら？”

そんなことを思いながら生子は、暗がりの中手探りで、子どもたちに渡そうと思っていたタンスの一番下にしまっておいた2つの束を取り出した。

“あった、あった”

その2つの束を手にして、生子は次に居室から居間に向かった。しかし、生子の足取りは重く、足を引きずるように歩いた。

生子には慢性心不全の既往がある上に、えみの里からここまでの1時間程の脱出劇で、精も根も使い果たしたのか、居間に着くと、猛烈な疲労感を覚えソファに座り込んだ。ソファに座った生子が真っ暗な中部屋を見つめると、生子には今は亡き母の由紀子やまだ小学生だった誠、孝子と囲んだ40年近く前の食卓の様子が鮮明に見えてきた。

“そうだ! 2人によいお話を聴かせてあげましょう!”

“何?! 何?!”

“さあ…おいしいココアでも飲みながら…おとぎ話の始まり、始まり…姨捨山というお話です…道に迷わぬようにと枝を折り捨てておいたのです。…その後、お年寄りも捨てられることなく、皆から敬われるようになりましたとさ…めでたし、めでたし”

“へ～、おばあちゃんって凄いなだね!”

生子は子どもたちとの会話を楽しみながら、子どもたちに渡そうとした束を握りしめたまま、静かに目を閉じた。

<4>

誠が実家に向かって車を走らせていると、再び携帯電話が鳴った。

「日比誠さんの携帯電話でよろ

しいでしょうか？ 私、セキュリティサービスの坂口と申します。17時32分、日比生子様宅のセキュリティシステムが作動したものですから、先ほど確認しに行きましたところ、お母様が自宅にお帰りになってみえたので、サインをいただき、任務を完了いたしましたのでご報告申し上げます」

“やはり帰っていたのか…これで一安心だ…”

「ありがとうございます。今から私も確認しに向かいます」

誠はセキュリティ会社からの電話を切ると、張り詰めていた緊張感が和らぎ、安堵のため息をついた。

この時誠は、すぐにでも孝子や良子、さらには石田にも連絡しようと考えたが、すぐに生子の様子を確認してから報告することにしようと考え直した。

18時20分過ぎ、誠が実家に到着すると、辺りはすっかり暗くなっていた。暗がりの中、玄関を開けようとする、玄関には鍵がかけられていなかった。「お母さん、ただいま！」

玄関先で誠が生子を呼んでも、返事は返ってこなかった。「母さん、いるんでしょ？」

誠はそう言って、暗がりの中玄関を上がると、玄関に備え付けてある懐中電灯を手にとって、足元を照らしながら居間に向かった。誠が居間に着き、懐中電灯で部屋を照らすと、ソファに座って首を垂れている生子の

姿があった。

「母さん、やっぱり家に帰ってきていたんだね。皆が心配していたんだよ。母さん、寝ちゃったの？……仕方ないなあ…」

誠は生子に毛布をかけてやろうと、生子の居室に毛布を取りに行った。生子の居室を懐中電灯で照らすと、タンスの一番下の引き出しが開けっ放しになっているのを見つけた。すると先ほど、生子がえみの里で話していたことを思い出した。

“あっそうだ！ お母さんね、お前たちに渡すものがあったのよ。ここに来る前に渡そうと思って、お母さんの部屋にあるタンスの一番下に入れておいたのを忘れてしまっていたわ…”

“何を渡そうとしたのだろうね…”

そう思って誠は笑った。

その後誠は、押入れから毛布を取り出すと、生子のいる居間に戻った。誠が生子に毛布をかけてやろうとしたその時、生子の手にしっかりと握りしめられた2つの束が誠の眼に入った。“これだね…母さんが、僕たちに渡したかったものは…”

誠はそう思って、その束を生子の手から受け取ろうとした時、暗闇の中、生子の手から終末の体温が誠に伝わってきた。

「母さん……………」

### 3. 道標

生子の葬儀は斎場で執り行われた。親戚一同を始め、生子の教え子たちを含む約600人にも及

ぶ参列は肅々と人の列をなした。

滞りなく式を終えると、誠と孝子は2人で、位牌ならびに遺骨、遺影をいったん実家へ持って行くことにした。

2人は実家に到着すると、生子の居室にある仏壇に、生子の位牌ならびに遺骨、遺影を並べ、手を合わせた。香の煙が部屋に立ち込めると、誠の胸には母親の優しさが身に染みて、悔恨の思いが胸に去来した。

「母さん……ごめんなさい……うっ…うっ」

式の間では気丈に振る舞っていた誠が遺影の前で嗚咽した。

孝子には、誠が遺影に向かって詫びている理由が痛いほど分かった。このような結末になるのだったら、生子を介護施設に入れなければよかったという悔恨の念である。

しかし、誠は孝子の悔いを凌駕するほどの激しい痛みを胸に抱えていた。香の煙と共に2人の思いはしばらく生子の部屋に漂った。そのうち、次第に香の香りに冷静さを取り戻した孝子が誠に語りかけた。

「お兄ちゃん。お母さんが私たちに渡したいものがあるって、施設で言っていた、タンスの一番下に入っているものって何だったのかなあ…」

孝子が誠に聞くと、おもむろに誠が重い口を開いた。

「孝子、母さんの渡したかった物はこれだよ」

誠はそう言って孝子に、孝子

名義にしてあるM銀行の「日比孝子」と書かれた通帳2冊と結婚後の名字である「加納孝子」と書かれた通帳1冊を手渡した。「全部整理したと思っていたけど、お母さん、まだこんなものをしまっておいたの？」  
「中を開いてごらん」

日比孝子と書かれた通帳は、孝子の誕生月から、毎月月末にきっちり20,000円ずつ振り込まれていた。また途中からは、「加納孝子」と名義変更した通帳に、毎月月末にきっちり20,000円ずつ振り込まれており、その金額は10,860,000円にも及んでいた。

そして、入金と記された後ろの空欄にはボールペンで、必ず一言ずつコメントが記されていた。

45-6-30 入金 待望の女の子、お母さんの宝物  
20,000 20,000

45-7-31 入金 名前は孝子ちゃん、雄二さん命名  
20,000 40,000

50-4-30 入金 幼稚園入学、初めての制服可愛い  
20,000 1,160,000

52-4-30 入金 小学校入学、ほっぺも桜色  
20,000 1,640,000

52-9-30 入金 参観日ストライキ、誠に同調  
20,000 1,740,000

「“参観日ストライキ、誠に同調” お兄ちゃん、これ覚えてい

る？ この時のこと、私今でも鮮明に覚えているわ！」

「ああ…僕も鮮明に覚えているよ。僕の通帳には“参観日スト、姨捨山話で祖母株上昇”と記されていた。あの時聞いた姨捨山の話は、今でも忘れない……………」

大粒の涙が誠の頬を伝った。「孝子、僕は母さんを姨捨山に捨ててしまったんだと思う……………。でも母さんは、僕たちが道に迷わぬようにと道標を残してくれた。…孝子、最後のコメントを見てごらん」

孝子は加納孝子と書かれた通帳の最後のコメントを読み上げた。

27-9-30 入金 明日姨捨山。今までありがとう  
20,000 10,860,000

「明日姨捨山。今までありがとう……これは……お母さんは自分の死に場所を悟っていたってこと？」



「母さんは、正気の世界では自分の死に場所を悟っていたのだと思う」

誠の答えに、孝子も誠と同じように、生子の悟りの潔さと、道標を残してくれた慈しみ深い母親の愛を感じずにはいられなかった。

その時ふと、どこからともなく風が吹き、ろうそくの炎が一閃した。誠と孝子は、生子の息遣いが聞こえたような気がした。物語の終わりを告げるように。

“その後、お年寄りも捨てられることなく、皆から敬われるようになりましたとき…めでたし、めでたし…”